旧総合庁舎
パネル展
煉瓦の記憶

2023.12.29まで

旭川市旧総合庁舎は旭川で青年期を過ごした建築家・佐藤武夫と旭川市建築課との協同設計でつくられました

旭川市総合庁舎の設計案について

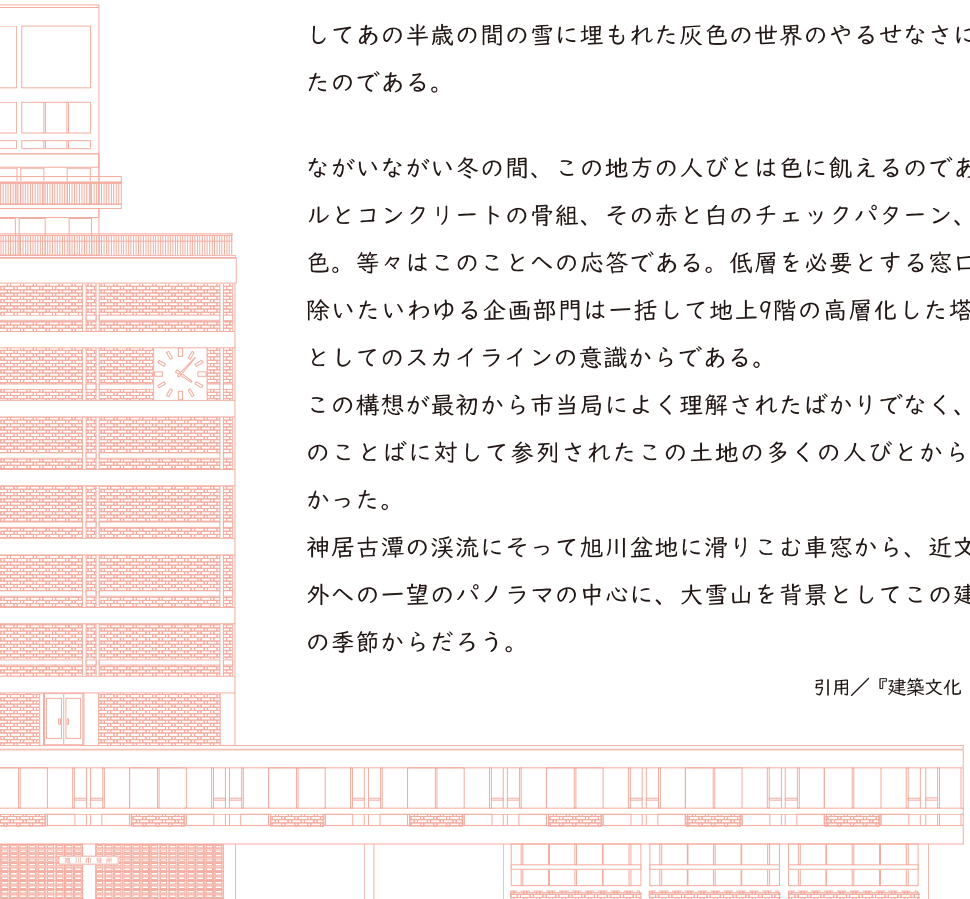
佐藤武夫

敷地は現市庁舎の隣りの三方道路に囲まれた約４０００坪、小学校に隣接した矩形の絶好の土地である。
都心でありながら偶々ここは住居地域なので急いで商業地域に地域変更の手続きを進めながら、この比較的潤沢な面積を利用して、のびのびとした計画を打ち出すことができた。
計画案は最初市の建築課で作製された。これに対して私は率直に勝手な意見を提出し、かなり思い切った修正を加えていただいた。さらにそれを原案として両社協議のうえ基本設計を確定したのである。
実施設計にあたっても、寒地建築としての特殊事情などに現地側の知見を動員する必要を感じ、乞うて市の建築課職員数名に長期の出張を煩わし、私の事務所内で完全に協同態勢で作業して貰うことにした。この意味でこの設計は両者の協同設計なのである。

特にここに記述しておきたいと思うことは、私のこの設計に対した基本的な考え方、そのうちでも特に創作上のイメージについてである。
旭川には私も少年時代の数年をすごした由縁と同時に、そこでの生活の経験がある。このことは重要な意味を持っている。少年時代への回想が心愉しくよみがえって来て、私を励ましてくれたばかりでなく、少年の頃とはいえ、あの半年の雪にうもれた寒冷の環境に対する実感は、いまも私のうちにもまざまざと生きているからである。
建築の風土性のことを考えるとき、その風土の事物的な面と並んで心象的な面をも尊重しなければならぬことを、観念としてではなく実感として私は感じそして訓えられたような気がする。
極寒多雪地帯の建築としてのさまざまな技術上の諸注意と同等の比重で、いやそれにもましてあの半歳の間の雪に埋もれた灰色の世界のやるせなさに憩いを致すことでそれはあったのである。

ながいながい冬の間、この地方の人びとは色に飢えるのである。煉瓦のカーテン・ウォールとコンクリートの骨組、その赤と白のチェックパターン、金属グリルの燦然とした黄金色。等々はこのことへの応答である。低層を必要とする窓口部門や市議会関係、消防署を除いたいわゆる企画部門は一括して地上9階の高層化した塔状に扱つたのもかえって都市としてのスカイラインの意識からである。
この構想が最初から市当局によく理解されたばかりでなく、起工式の際に辯じたこの意味のことばに対して参列されたこの土地の多くの人びとから共感を寄せられたことは嬉しかった。
神居古潭の渓流にそって旭川盆地に滑りこむ車窓から、近文の駅あたりから展がる旭川市外への一望のパノラマの中心に、大雪山を背景としてこの建築が座を占めるのも来年の雪の季節からだろう。

引用／『建築文化　昭和32年7月号別刷』（彰国社・1957）



Modernism 旧総合庁舎に見るモダニズム建築

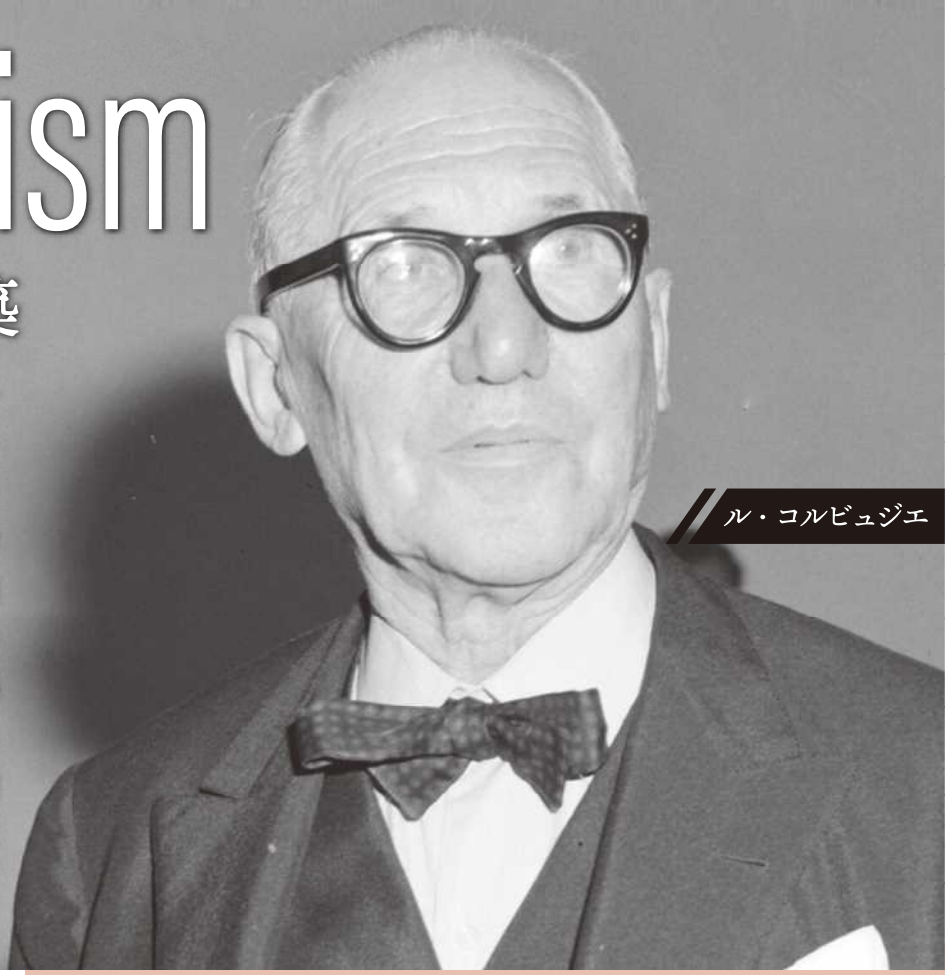
産業革命によって出現したコンクリート、鉄、ガラスなどの新しい素材と技術合理性、機能性の追求は、自由な建築表現を可能にしました。それまでの伝統的な手法や権威主義的デザインを用いた建築を否定し、洗練された主観主義的表現を尊重する新しい建築様式である「モダニズム建築」。20世紀の最大のイノベーションは建築手法に大きな革命をもたらしました。

旧総合庁舎は北海道の公共建築で唯一の文化遺産としてDOCOMOMO100選にも選定され、モダニズム建築として高い評価を得ています。

modernism

モダニズム建築

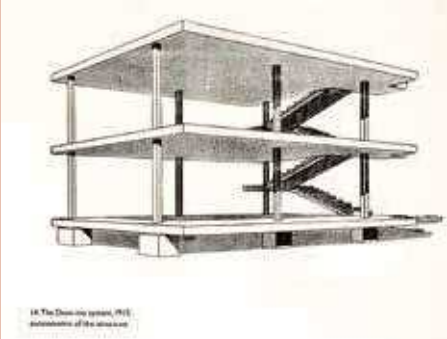
モダニズムを世界に知らしめ、後世に多大な影響を与えた近代建築の巨匠、ル・コルビュジエ。
1887年にスイスで生まれ、地元の美術学校で学んだ後にウィーン、ベルリンで建築、工芸の新しい運動に触れ、パリでキュビスムの影響を受けました。建築のみならず絵画、彫刻、家具のデザインもしており、第一次大戦後には雑誌の刊行を手掛けるなど、20世紀の近代建築、デザインに大きな影響を与えました。



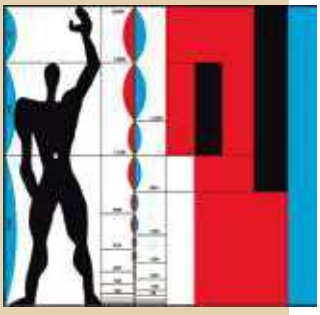
ル・コルビュジエ

ル・コルビュジエの代表作、サヴォア邸で実現された「近代建築の五原則」はその後の建築に大きな影響を及ぼしました。

ル・コルビュジエが1914年に発表した「ドミノシステム」。鉄筋コンクリートのフレーム構造によってスラブ、柱、階段のみを建築の主要素とすることで、自由自在に空間を広げることが可能になりました。この新しい建築理論によってそれまでの石積み・レンガ積みによる西洋の伝統的な建築からの転換が図られました。



ル・コルビュジエが第二次世界大戦中に考案した建築の基準寸法システム、モデュロール。
ダ・ヴィンチの人体図などを踏まえて人間の身長と臍（へそ）の高さが黄金比になることに着目。人間の身体と黄金比に沿った建築を目指して独自の寸法体系として展開させました。
この体系による寸法基準は建築のみならず、家具から都市に至るまで対応し、美的にも機能的にも調和のとれた建築やものづくりが評価されるようになりました。



ドミノシステムによって体現された集合住宅「ユニテ・ダビタシオン」。8階建て337戸の大型建造物でありながら、ピロティで地面から持ち上げられたような構造となっています。
よく見るとピロティが単なるデザイン上のアイデアではなく、ピロティによって解放された空間を人々が行き交い、風が通り抜け、車の駐車スペースにも利用できるよう配慮されて造られたものであることがわかります。

modernism 近代建築の五原則① ピロティ

ピロティとはフランス語で「建物を支える杭」を意味します。モダニズム建築の特徴である柱による持ち上げられたピロティによって、軽やかな自由な空間を生み出しています。旧総合庁舎にもある、その軽やかで自由な空間は市民に開かれた庁舎であることが伝わってきます。

modernism 近代建築の五原則② 屋上庭園（テラス）

コンクリートによる構造は、それまでの建築様式では考えられなかった平らな屋根（陸屋根）を可能にしました。建物を四角い箱型とすることにより、空と一体となった屋上テラスという平面空間が生まれ、庁舎に開放感をもたらすこととなりました。

modernism

近代建築の五原則③

自由な平面

鉄筋コンクリートを使用することで、柱と梁が構造的に建築を支えることが可能となり、壁の配置を気にすることなく、自由に部屋を配置できる「自由な平面」を獲得しました。

modernism

近代建築の五原則④

連続した横長窓

柱を内部に配置することで、建物の端から端まで連続させて窓を見せています。この水平な連続窓によって、庁舎内部を均質的な明るい光で満たし、直線的かつ規則的な存在感を与えています。

modernism

近代建築の五原則⑤

自由な立面

モダニズム建築の特徴である自由な立面による外観デザイン。
現在の建築では当たり前のスタイルですが、これは鉄筋コンクリート造が生み出されたことによるもので、絵画を描くように開口部や壁の位置などを自由に決められるようになりました。

modernism

ディテール

神は細部に宿る。
ル・コルビュジエが確立した近代建築における
デザインの神髄がディテールに現れています。

赤・青・緑のドア

モダニズム建築は鮮やかな色使いにも象徴され、旧総合庁舎の鉄製ドアの配色にも赤や青、緑の原色が用いられています。

ランダムな開口デザイン

永隆橋通側の壁面をよく見るとランダムに配置された開口部を見つけることができます。これは、モダニズム建築の影響によるデザインです。

床から浮かせた階段

重いはずのコンクリート製の階段は、床から縁を切って一段目を宙に浮かせることで軽やかな印象のデザインとなっています。

History 総合庁舎の年表

年	
1890	上川郡に旭川、神居、永山の3村を置く
1899	建築家 佐藤武夫、名古屋市に生まれる
1900	旭川村から旭川町と改称
1901	第七師団司令部が札幌から旭川に移駐
1911	旭川町役場庁舎が完成（洋館仕立て2階建）
1915	佐藤武夫、北海道庁立上川中学校に入学
1955	神居村、江丹別村が合併。人口16万人となる
1956	市総合庁舎建設促進審議会の設置 9月15日
1957	大旭川建設計画策定
	市建設部建設課員を東京の佐藤武夫設計事務所に派遣 3月13日
	総合庁舎の地鎮祭、起工式 6月13日
1958	旭川市総合庁舎竣工 10月30日
1959	日本建築学会作品賞受賞
2001	旭川の歴史的建物の保存を考える会 第4回建築賞受賞
2003	DOCOMOMO Japan「日本におけるモダン・ムーブメントの建築100選」に選出
2016	「旭川市新庁舎建設基本構想」発表
2024	解体工事を予定

建築賞受賞プレート

第4回建築賞受賞式の様子

総合庁舎落成式記念撮影。前野与三吉市長と関係職員

建築中の総合庁舎

竣工時当時の緑橋通

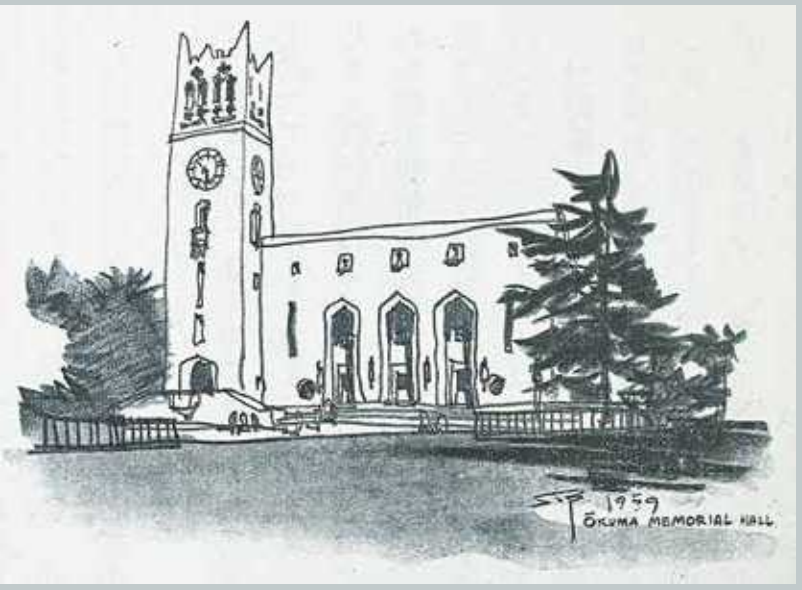
Architect

建築家 佐藤武夫

日光東照宮の鳴竜現象を科学的に解明した建築音響工学の先駆者、戦後日本を代表する名建築家。

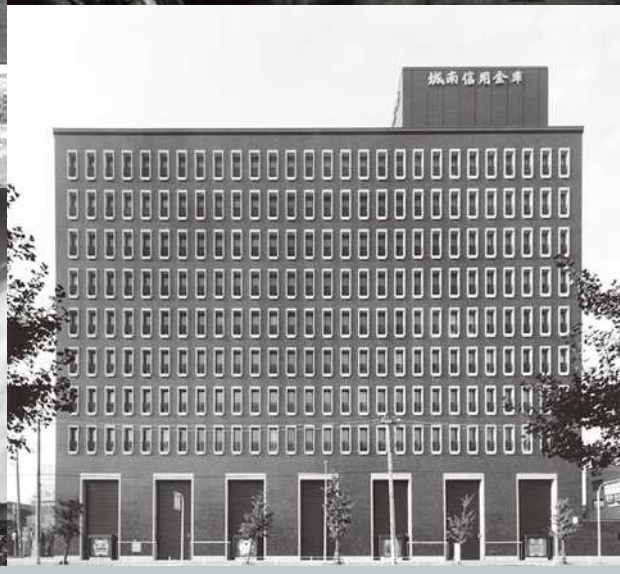
佐藤武夫は明治32年に陸軍士官の長男として名古屋市で生まれ、学生時代の3年間を陸軍第七師団が置かれた旭川で過ごしました。
旭川の旧制上川中学校（現旭川東高校）で学び、早稲田大学に進学。卒業後はそのまま早稲田大学の助教授として指導する一方で、戦地から復員してくる教え子たちと東伏見の自宅をアトリエに改造し、昭和21年に佐藤総合設計事務所を開設しました。
教育者、経営者として設計業の確立や新たな建築資材の普及に邁進し昭和29年には株式会社佐藤武夫設計事務所（現株式会社佐藤総合計画）を設立しました。
建築家としての代表作には旭川市総合庁舎のほか新潟市庁舎、岩国市庁舎、北海道開拓記念館などがあり昭和32から34年まで日本建築学会会長も務めました。

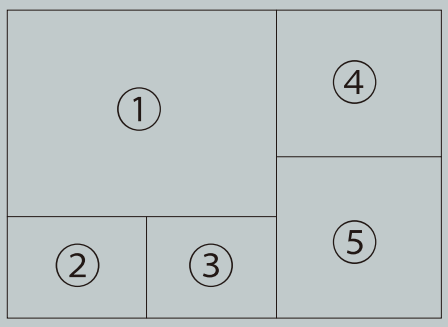
学生の頃は新劇運動に熱中し劇場史を研究するほどの芸術青年で、佐藤武夫が描くスケッチは「天賦の芸術才能と情熱のぬくもり」と称されるほどで、水彩によって丁寧に色付けされたパースの数々が残されています。
また塔は古くから人々の精神の拠り所であり、街並みを形成していることに着目。佐藤武夫が設計した建物の多くが塔を構えていることから「塔の佐藤」とも呼ばれました。



佐藤武夫の実質的なデビュー作品「早稲田大学大隈記念大講堂」のスケッチ。同大学建築学科の創始者で我が国の住宅学や民家学の基礎を築いた佐藤功一との共同作品として知られています

佐藤武夫が昭和20年代にデザインした佐藤総合設計事務所のロゴマーク「目玉判」の図案





①長野市民会館（1961）長野県長野市
　1963年 建築業協会賞
②新潟県民会館（1967）新潟県新潟市
　1968年 日本科学防火協会賞
③福岡県文化会館（1964）福岡県福岡市
　1966年 建築業協会賞
④熊本市民会館（1967）熊本県熊本市
⑤城南信用金庫本店（1970）東京都品川区
　1972年 建築業協会賞

北海道博物館（旧北海道開拓記念館）（1970年）
札幌市厚別区
1973年　日本建築学会賞作品賞

大旭川建設計画の號令

総合庁舎の建設は昭和32年2月、旭川市で最初の総合計画「大旭川建設計画」によって計画が策定されました。

旭川市は明治23年の開村から第七師団の移駐、戦時動乱、戦後復興、周辺町村との合併を経て、人口が膨れ上がり、昭和30年には人口16万人に達していました。
当時の旭川市長、前野与三吉は人口50万人を擁する総合近代都市・旭川の建設を目指し、産業基盤の整備、産業の高度化、生活文化の向上と生活の保障を柱にした総合計画を策定し、総合政策によって、道北道央における経済的、文化的中心都市として旭川の発展開発を推進しようとしました。

昭和32年2月に発表された「大旭川建設計画（計画編）」には総合庁舎建設のほかに産業振興計画、都市計画、交通通信計画、国土保全計画、文化厚生計画、観光開発計画、財政計画や人口及び雇用、市民生活が網羅されていました。

第７章　行政機能向上計画

第２節　公務能率の向上対策

第１　一団地官公庁施設計画

１　計画の基本目標

本市の官公庁の実状並びに交通、経済等の総合的に現況を把握の結果無計画に散在しているため市民に相当の不便をかけているので本市新設総合庁舎を中心とした地域を一団地官公庁地域と指定し、官公庁を一括収容して行政能率の向上及び市民の利便を図りあわせて広場及び緑地等を計画して市民の憩いの場とする。

２　事業計画

本市新設総合庁舎を中心とした地域 20,000 坪を指定し逐次官公庁を建設し将来においては大官公庁街化するよう計画的に推進する。

第２　市庁舎対策

１　現況と問題点

現庁舎は爾来 40 有年を経過し、市政の伸張とともに次第に狭隘となり逐次増築を加えて来たが、最近における急激な人口の増加と市行政事務の複雑多岐化に亘たる増大とにより狭隘の度は頂点に達した。

現在は本庁の外分室５カ所に分れ執務している状態であるので行政事務の遂行の上極めて支障を来たし、能率の上らないことは云うまでもなく、且つ市民の不便は論を俟たないところである。

その上これらの建物の老朽化による維持管理上の経済的損失も尨大なものがあるので、早期総合庁舎の完成が急務とされる。

２　計画の基本目標

そこで市庁舎を建設し、これらの損失、不便を解決しようとするに当り市の現況から顧みて、消防本部を包括する総合庁舎を計画、市民のシンボル、或いは憩いの場所、そして市の象徴として市民のものとするためと総合機関の集中にる成互の利用度を高め経済的、能率的効果を企り市民の利益に資する。

３　事業計画

鉄筋コンクリート５階乃至８階（地階を含む）一部２階建てとし、北海道の寒冷地の特殊性と冬期間における暗さに対して夏季における北欧的明るさをもつ本市の特徴を盛った明るい発展的希望を抱きうるような勇壮華麗な建築様式をもったものとする。

４　資金需要額　　（単位千円）

事業名	事業量	事業費	負担区分			
			国費	道費	市費	民間
市総合庁舎建設	敷地面積 6000 坪 鉄筋コンクリート ５階～８階建 （地階含む）	350,000	–	–	350,000	–

限界を超えた狭さ

初代旭川市庁舎

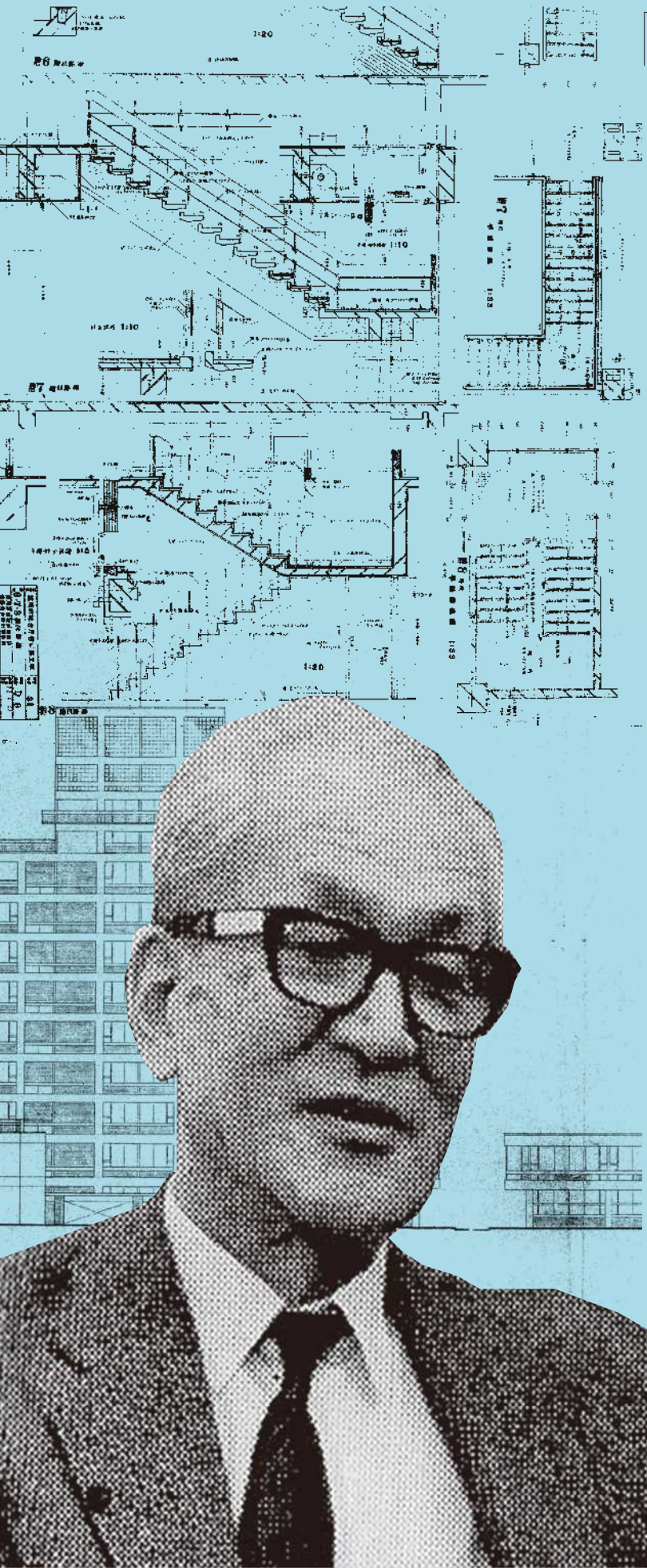
当時、旭川市の庁舎は明治44年に旭川町役場として建てられた2階建ての洋館でした。
庁舎は47年の間に改修し尽くされ、すでに増築するための敷地が不足していました。低い天井、ムッとする人混み、昼でも電灯なしでは事務を執れない薄暗い室内、歩けば机のゆれる床板、曲がりくねった廊下。戦後の人口の急増と自治体行政の改変による事務の増加、職員増によって庁舎の狭さは限界まできていました。
事務能率は落ち、ムダな費用がかかり火災の心配も尽きませんでした。

シンボルであり憩いの場所、市民に開かれた行政機関として市民の利益に資する庁舎を！

大旭川建設計画の立案、実現を果たした当時の市長、前野与三吉は石川県で生まれ5歳で両親と来道し神楽村に入植。若くして運送業を興し、林業、木材業など事業を広げつつ政治家の道に進んだ実業家で、市議会議員5期、道議会議員2期の間に国策パルプを誘致するなど活躍し、昭和22年に公選初代市長に当選しました。
実行力のある市長として学校増設、北海道開発大博覧会を成功させ、2期目の選挙では落選するものの昭和30年の市長選で返り咲きを果たし、大旭川建設計画の実行に着手したのでした。

新庁舎建設を進めた当時の旭川市長
前野与三吉
1889.5.31 ～ 1975.8.12

Design 設計のポイント



大正元年（１９１２年）から、３年夏まで、当時、13、4歳の多感な中学生だった佐藤武夫少年は、陸軍軍人だった父の任地・北海道旭川市第七師団の将校官舎で、家族全員と共に、平和な生活を過ごしていた。

後年、建築家になった佐藤武夫に「旭川市が、新庁舎を建設することになった」という情報を手紙で伝えてきたのは、中学生時代に旭川中学で机を並べていた同級生で、「予算がついたばかりだそうだから、すぐに市長に会いに来たらどうか」と、つけ加えて書いてあった。

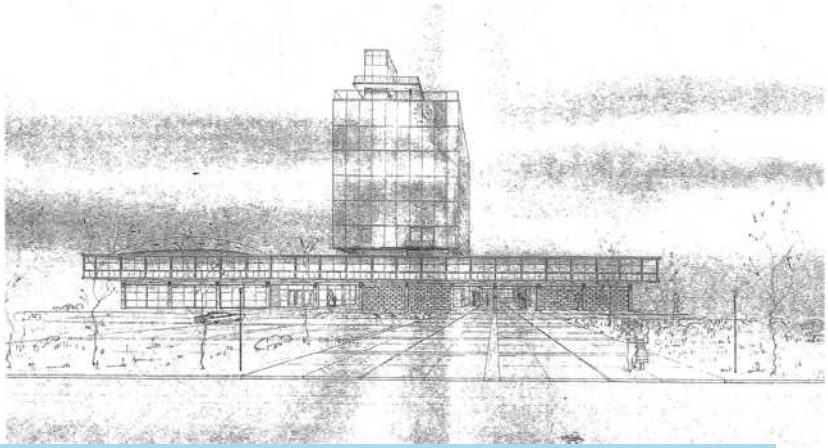
喜んで、単身、旭川に乗りこんだ。
うまいことに、旭川入りしたその日のうちに、市長をはじめ市会議長や議員首脳たちと面接ができて、即座に話がついた。しかし、財務担当の助役のデスクで打ちあけられた設計予算が、３００万円しか計上されてないと聞いて「さて、困ったぞ」ということになったのである。

東京並みのちゃんとした仕事をやるとなると、1,000万円でも足が出るのだ。だが、「それではムリだから、辞退する」ともいいだしかねて、「お互いになにかいい方法を工夫しましょう」ということで、その日は市内に一泊、翌日そうそうに引き揚げた。

「旭川か」。少年時代への郷愁をちょっぴり味わいながら、所員たちの図版を見てまわっていた所長が、ふと下妻のところで立ちどまると、「妻さんよ。旭川の市長から、新庁舎の設計をやってくれと、手紙がきたよ。やりたいのは山やまだが、設計料が３００万円では、どうにもこうにもな。ただいま、思案投げ首というところさ」

引用／『ロマンティストたちの家　佐藤武夫と佐藤総合計画の半世紀』
（日本建設通信新聞社・１９９７）

ガラスのカーテンウォールか



旭川市建築課による最初のスケッチ

市長、前野与三吉は新しい庁舎に当時建築デザインとして一世を風靡していた「国際様式」をイメージしていました。
昭和31年には新しい庁舎の建設計画が内示され、先行して旭川市建築課による設計が着手され、その際の素案にはガラス壁面で囲まれた四角い箱のような庁舎が描かれています。

モデルとなった清水市庁舎

旭川市建築課でスケッチを描いた石崎繁敏氏は、当時建築界で注目を集めていた静岡県の清水市庁舎をモチーフにして素案を描いたことを認めています。
清水市庁舎は昭和29年に丹下健三によって設計されたわが国のモダニズム建築の先駆けで、ガラス張りの壁面や建物中央の中庭など戦後民主主義を体現する空間としてオープンスペースの在り方が表現されています。

丹下健三　1913.9.4～2005.3.22

欧米で広まったモダニズム建築に早くから着目し、日本の伝統的な建築技法を取り入れ、コンクリートによって軒や柱梁を繊細に表現するなど日本独自のモダニズム建築を確立させた20世紀を代表する建築家。代表作は清水市庁舎のほか、広島平和記念資料館(1955)、香川県庁舎(1958)、東京カテドラル聖マリア大聖堂(1964)など。

冬に映えるレンガの塔か

智慧と技術を出し合って協同設計

旭川市土木部建築課の松井辰雄課長が随行の技術職員二人を連れ、突然、事務所に姿を現したのは、そのすぐあとのこと。

「さて、課長さん。いろいろ考えをめぐらしていたのですが、こういうことではいかがですか。市のほうで設計予算が少ない、うちも手が足りなくて仕事のやりくりに苦心さんたんしている。
いっそ、両方から人と智恵と技術を出し合うようにして、合作で実施設計をやるようにしたら、なんとか解決できるのではないのかしら」

「それで結構です。さあ、この上は、少しでも早く、東京ふうの、パリッとした全面ガラス張りの、モダンで明るい庁舎にお目にかかりたいものです」

「それは少しちがうのです。私ども、設計をお受けしても、課長さんがイメージしておられるような、東京ふうのガラス張りのカーテン・ウォールの庁舎などは、けっしてやろうとは思っていません。ペア・ガラスといった高価な建材を使う予算なんか、はじめから取れないのですから。

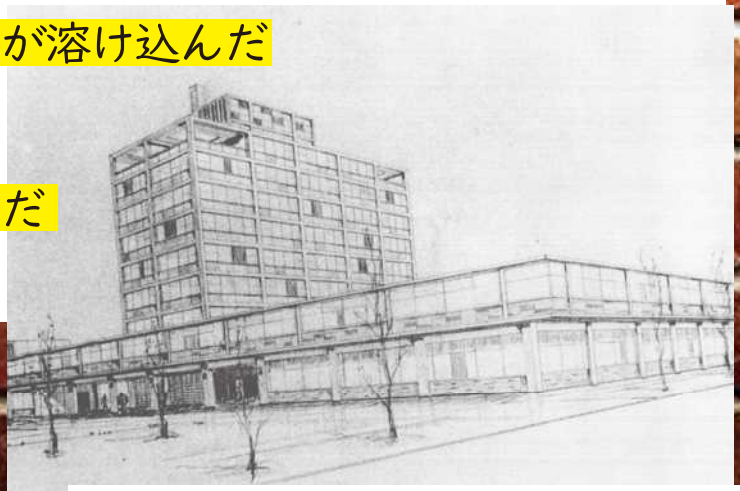
北海道内陸部の気候風土に合ったデザインでやるつもりでいるのです。
重い北国の空の下にレンガの赤さが、しっとりと溶け込んだ風ぜいをもつ庁舎こそ、北海道の地方行政にふさわしいイメージなのです。

市民のみなさんは、親しみをもって出入りできる庁舎を望まれているのではありませんか。多雪寒冷地帯の旭川で、ガラスのカーテン・ウォールはむしろとんでもないことで、ガラスは結露するし、その結露が室内暖房で溶けて流れだしたらメンテナンスにも困るようなことになる」

旭川から来た客人たちは、北海道なら、道内どこででもお目にかかれる、あの古びたレンガづくりの建物の感触を、内地の人はなぜ珍重するのか、そしてあの見るからにモダンな全面ガラス張りの近代ビルをなぜ悪くいうのか、それがさっぱり理解できないといった、あいまいな顔つきなのである。

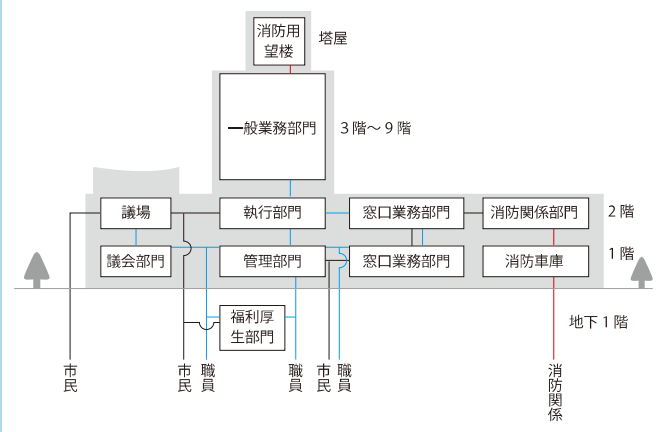
引用／『ロマンティストたちの家　佐藤武夫と佐藤総合計画の半世紀』
（日本建設通信新聞社・１９９７）

重い北国の空の下にレンガの赤さが溶け込んだ
風ぜいをもつ庁舎こそ
北海道にふさわしいイメージなのだ



佐藤武夫事務所による外観の検討案

佐藤武夫による旭川市総合庁舎の体系図



配置計画、そして白い雪の原野に赤いランドマークを

設計者が、最初に解決しておかなければならないのは、市から示された敷地を対象としたブロック・プランの決定である。

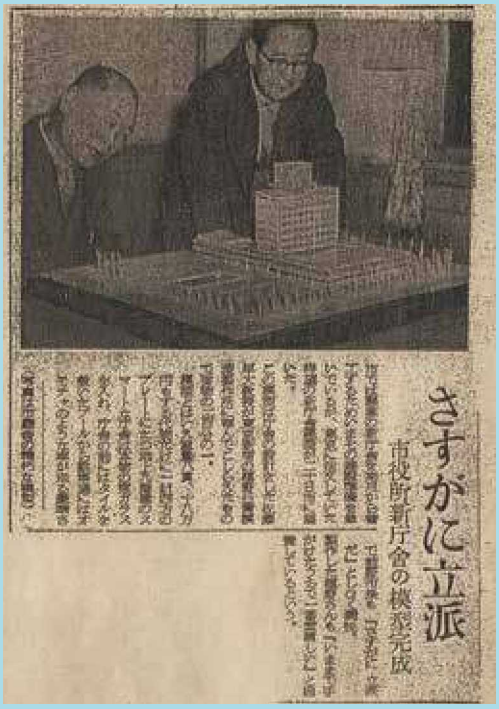
「まず、この広い敷地の中に、２階建ての低層ブロックを置き、その上部の空間に、いまの法律で許される範囲内で、高層の庁舎を乗せる。低層部には、市民サービス関係の窓口的な部門の他に、市長室とかその執行部関係の業務を集め、市議会議場と、議会に関連する各派議員の控え室とか政策委員会室などを、有機的に組み合わせて設ける。

その上の３階から９階までは、総務、財務、土木、保健、衛生、商工、農林、教育委員会、選挙管理委員会とかを積み重ねる。
―こうして、建物を高層化することによって、この庁舎に、限りなく広い北海道内陸部原野の中のランド・マークの役目をもたせ、それによって生じた敷地の余った部分は、庭園として活用する。

あの市街地の街並みと街路樹の木立の上に、一きわ高い庁舎が見える。それは、白い雪の原野の中で、よく目につく赤いレンガに装われている。あの高層棟の１階には、市民のための窓口があって、そこへ行けば、戸籍謄本ももらえるし、婚姻届や出産届も受けつけてもらえる。

住んでいる人は、そうした用事があれば、そのランド・マークを目標にして、かんじきで雪をこいだり、場合によっては、ソリに相乗りして出かけて行く。ブリューゲルの絵のように、牧歌的で、いい風景じゃないか」。佐藤所長は、目を細めてゆっくりと下妻に語った。

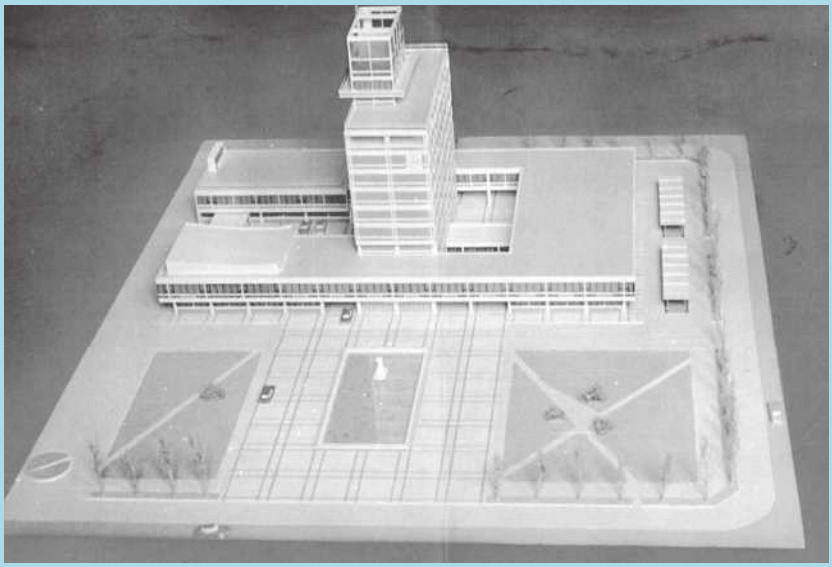
引用／『ロマンティストたちの家　佐藤武夫と佐藤総合計画の半世紀』
（日本建設通信新聞社・１９９７）


さすがに立派
市役所新庁舎の模型完成

旧庁舎の模型が完成したことを報じる新聞記事。ともに日付は昭和32年４月21日

市庁舎の模型出来る
費用はなんと17万円

模型製作会社「植野石膏模型製作所」（東京）に依頼してつくられた総合庁舎の1/200模型



寒冷地に対応した庁舎技術的対策の数々

この土地では、秋口から春さきにかけての長い冬じゅう、コークスをがんがん焚いて、暖房をとっているから、どうしても煤煙が出る。それが、窓の下とか、窪みとかに溜まって、雪が積もったり雨になったりすると、たちまち外壁を汚してしまう。だから、レンガで外装をまとめるにしても、凹凸にしないほうがいい、ということだ」

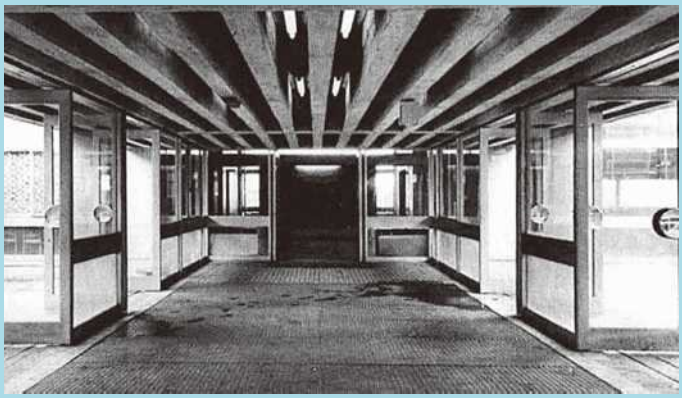
北海道内陸部の寒冷と積雪といえば、佐藤所長と下妻力は、市から派遣されてきて、一緒に働いた技術職員から、いろんな技術的対策を聞き出しては大胆に仕様書に織りこんでいる。

たとえば、建築物の基礎の場合。極寒期には地下２メートル近くまで凍結するので、基礎部分の土が地上の水分を吸って凍上させられる。これをあらかじめ、そっくり砂利に置き換えておけば、そこまでいかなくてもすむ。

また、庁舎の玄関や出入口まわりの地下にパイプを埋没しておき、積雪期には常時湯を通して融雪するような装置を考案して、これも仕様書に採用した。
市民や通勤の職員たちは雪の中を歩いてくるが、市役所のまわりのそこまでくると、雪はきれいに融けている。雪国の市庁舎の環境は、これで快適に改善される。

―佐藤武夫を中軸とする地下アトリエの住人たちと、旭川から出張してきた現地技術者たちとの合作による実施設計は快調にまとまっていった。

引用／『ロマンティストたちの家　佐藤武夫と佐藤総合計画の半世紀』
（日本建設通信新聞社・１９９７）

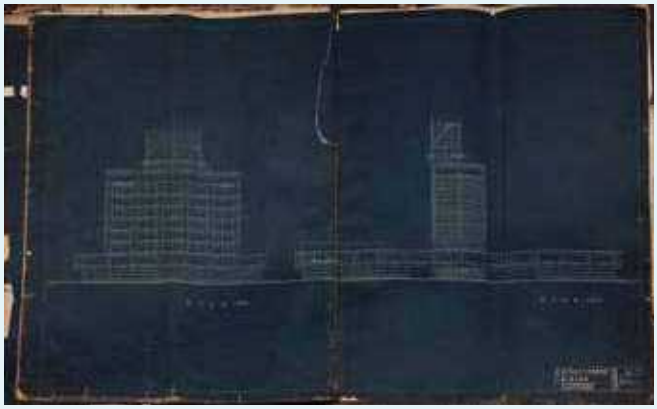


床に配置された日本初のスノーメルト（融雪装置）

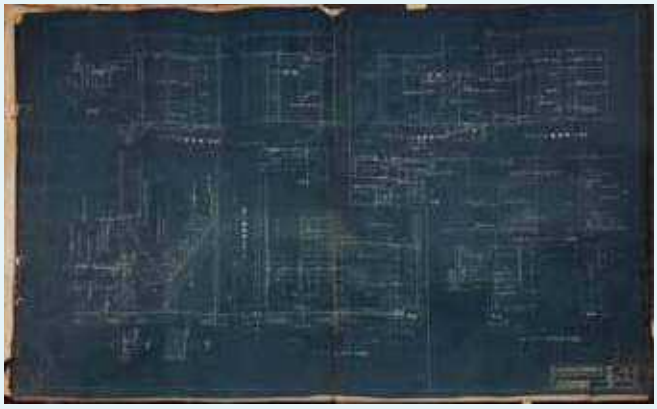
旭川市総合庁舎新築工事の青図

設計当時、図面の多くはトレーシングペーパーに作図されました。作図された図面は青焼機で複製され、その複製されたものを青図といいます。

「旭川市総合庁舎新築工事」の青図表紙
旭川市建設部建築課と佐藤武夫設計事務所が連名で記されています



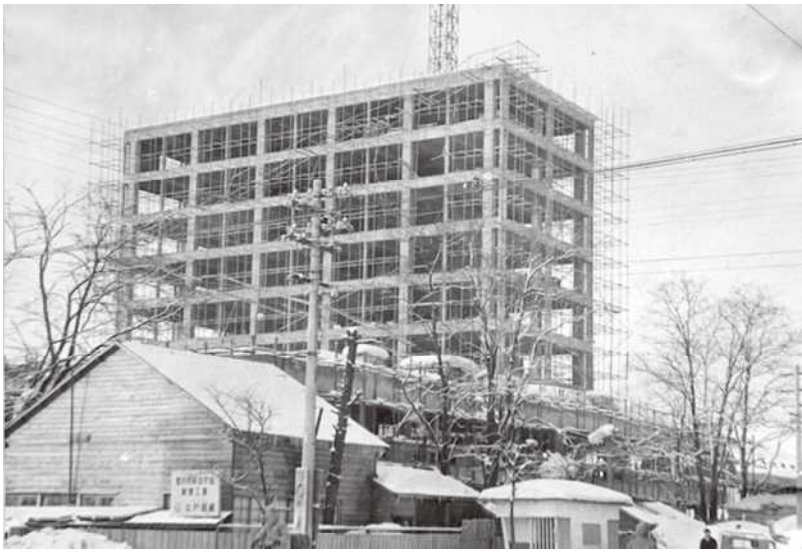
南・西立面図。凹凸のない壁面、塔屋にはグリルが描かれています



公式玄関・階段、公式玄関詳細図、議員玄関正面詳細図

穴あきブロックとネームプレート、右図は吸排気塔詳細図

起工式
建設工事



役所だより

職員広報家庭版

昭和32年8月25日発行

みなさん！お元気ですか

市長　前野与三吉

1号

旭川市役所発行

「役所だより職員広報家庭版創刊号」
（昭和32年8月発行）

大旭川建設計画では職員の福利厚生、広報広聴活動の強化と対策も図られました。
この資料は職員とその家族に向けて作られた瓦版の創刊号。その表紙では前野市長自ら旗を振り、大旭川建設計画の実施に向けて職員の結束を呼びかけ、次ページでは計画実施の中枢となる新しい庁舎を紹介する記事が掲載されていました。

（2）

市民のための新庁舎

近代的な設備と構造を誇る

（写真は新市庁舎建設工事）

市の重要業務

こうして進められる

完成間近の旧総合庁舎

竣工
開庁式

総合庁舎落成式記念撮影。前野与三吉市長と関係職員

壹屋総本店謹製、総合庁舎の完成を祝うケーキ

屋上からの眺めを一目見ようとエレベーターに行列

「新建築」に寄せた下妻力による解説文

市側の要望として、庁舎は、市の象徴で、市勢を表徴するものであり、かつ市民生活の中心機能を果たすものであること、市民から親しまれるものであることなどの希望があり、近代的な高層建築として、当初より計画された。

敷地は商業地域に隣接する居住地域であったものを、用途変更の手続きを行い、高層建築の可能な商業地域とし、将来の市の発展に備えたのも、この様な考え方からに外ならない。増築に対しては高層部の東西方向を予定し、長手の方向の梁、床版ともはね出しを利用したカーテンウォールとし、低層部も勿論増築に対して考慮が払われている。

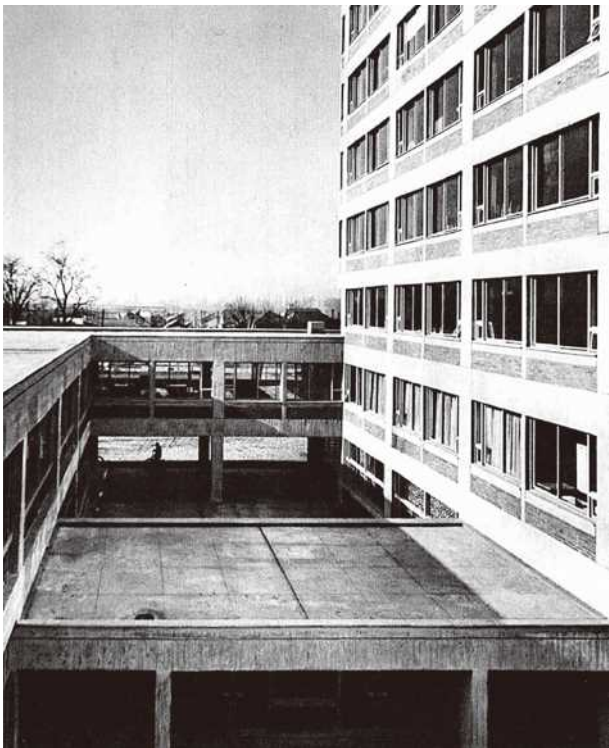
旭川は北海道でも極寒多雪地帯として知られ、寒冷地対策には特に留意した。ディテイルについては、市建築課から数名の課員が加わり協議しながら設計を進めた。

冷害に対してはできるだけ建物の表面凹凸を避け、特に繰りかえし凍融に対してできるだけ鋭角的な人隅角部を作らぬ方針を採った。壁体にはドリゾールブロックを多く使用し断熱を計り、また玄関ホールの床下全体にはパネルヒーティングを行い履物で運びこまれた雪の熔融（スノーメルト）を計った。北欧などにはよく見られるものであるが、わが国では初めての試みである。また、人口はおおむね下が地下室となっており、地下室の天井を通しこの余熱でスノーメルトが図れるのではないかと思っている。その他、雪解けによる外壁の汚れを防ぐための水切りに対する留意、防水層の押え、犬走り部分の根雪対策など、諸々検討を行った。

特に外壁のコンクリート打放しの骨組と、レンガ積の赤い色の採り合せは、半年の灰色の陰うつな世界にとじこめられる市民に、色彩による慰楽を与える効果をねらったものだが、消防の望楼として使用される塔屋部分は格子組の中に金色アルマイトのドーナツ型の環をはめ込んだ格子（グリル）とし、視覚効果を特に期待したが予算の関係で実現できなかったことは残念である。

引用／『新建築１９５９年２月号』（新建築社・１９５９）

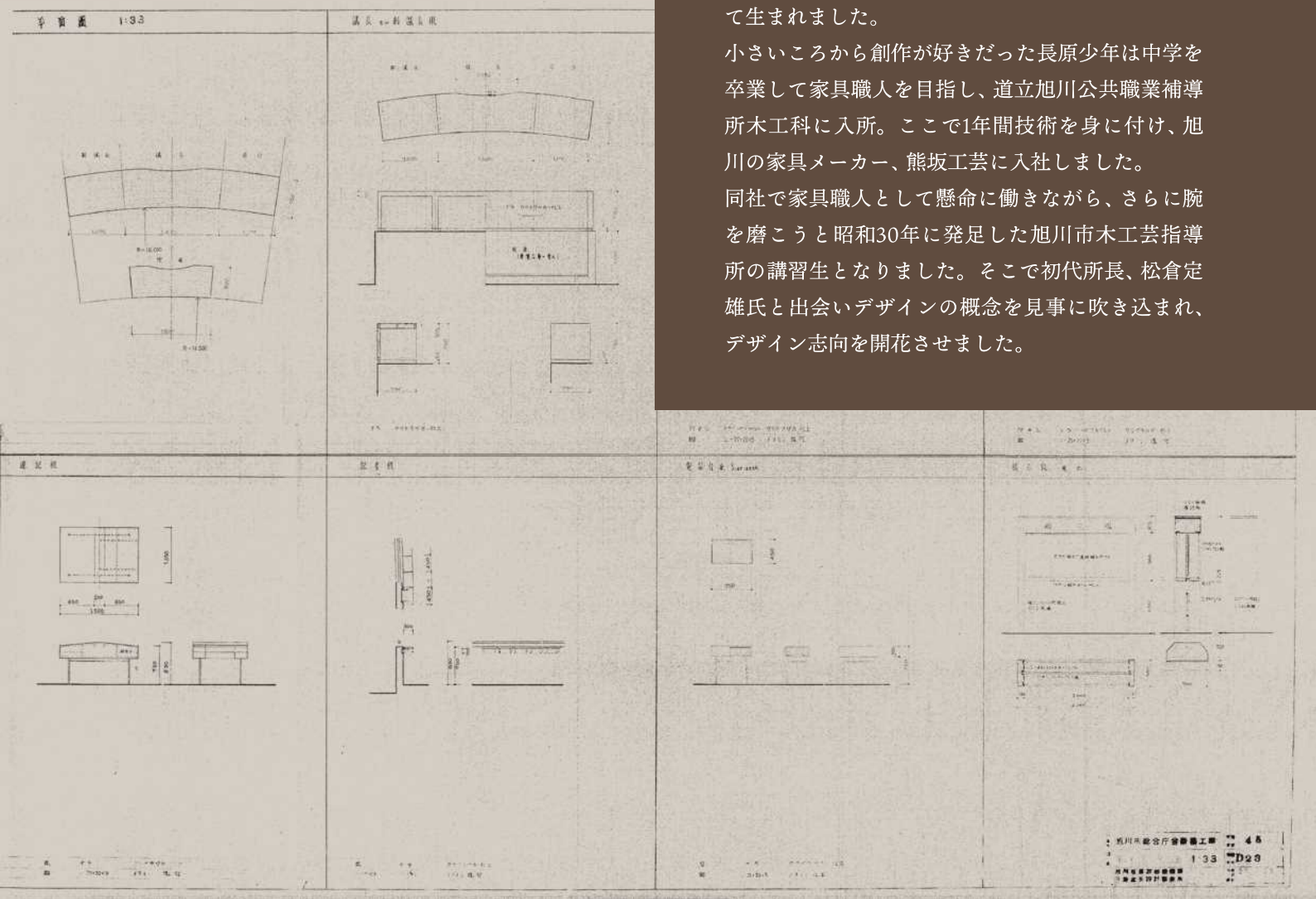
青焼きの設計図に描かれたアルマイトのグリルデザイン。朝鮮戦争による資材不足で陽の目を浴びることはありませんでした。



旧総合庁舎の旭川家具

佐藤武夫設計事務所と旭川市建築課による当初の設計図には議場に備え付ける議長や副議長、議員の議事机、演壇、速記席や記者席などの木製家具が描かれていました。これらの家具は後にインテリアセンター（現カンディハウス）を創業する若き長原實氏を中心に製作されました。
議場のほかにも議長副議長室の机や応接テーブル、ソファも旭川でつくられた家具が使用されていました。

長原實氏は昭和10年、東川町の小作農家の4男として生まれました。
小さいころから創作が好きだった長原少年は中学を卒業して家具職人を目指し、道立旭川公共職業補導所木工科に入所。ここで1年間技術を身に付け、旭川の家具メーカー、熊坂工芸に入社しました。
同社で家具職人として懸命に働きながら、さらに腕を磨こうと昭和30年に発足した旭川市木工芸指導所の講習生となりました。そこで初代所長、松倉定雄氏と出会いデザインの概念を見事に吹き込まれ、デザイン志向を開花させました。



旭川の風景に与えたデザイン

佐藤武夫がこだわったレンガとコンクリートによるデザインはその後の旭川市の建築に大きな影響を与えました。その理由として、雪国の冬を明るく彩り市民に温かい気持ちを与えるレンガによる彩の効果が挙げられます。
もうひとつは、旭川市が応分の設計料を支払う余裕がなく、資金の不足を埋め合わせるために建築課職員を佐藤武夫事務所に出向させたこと。このときの技術職員の経験がその後の公共建築の設計に生かされたと考えられます。

旭川市公会堂（1958年）

旭川市青少年科学館（1963年）

旭川市立近文小学校（1979年）

石狩川治水学習館（川のおもしろ館）（1990年）

旭川駅前広場（2013年）

Awards 旧総合庁舎の評価

日本建築学会賞 作品賞を受賞

旧総合庁舎は昭和34年に国内最高峰の栄誉である「日本建築学会賞作品賞」を受賞しました。

同年のエントリー作品は37点で村野藤吾、吉村順三、菊竹清訓、今井兼次、芦原義信、佐野正一など日本を代表する建築家による作品がノミネートされるなか、4作品が建築賞を受賞しました。

旭川市総合庁舎は「意匠的製作意欲の過剰によって必要以上の工事費を要することを慎んだ設計、高い寒冷地対応性、レンガを採用した点」が評価され、北海道で初めて作品賞受賞に輝きました。

村野 藤吾

吉村 順三

今井 兼次

佐藤 武夫

佐野 正一

芦原 義信

菊竹 清訓

ノミネートされた作品

日本航空ホテル
芦原義信

同年作品賞受賞
寿屋山崎工場
佐野正一

同年作品賞受賞
中央公論ビル
芦原義信

八幡市民会館
村野藤吾

村野藤吾
新歌舞伎座

小涌園本館
吉村順三

島根県立博物館
菊竹清訓

同年作品賞受賞
大多喜町役場
今井 兼次

岩国市庁舎
佐藤武夫

菊竹清訓
スカイハウス

文化遺産としての モダニズム100選 DOCOMOMO

053
旭川市庁舎
Asahikawa City Hall 1959
佐藤武夫
Takeo sato

旧総合庁舎は2003年の「日本におけるモダン・ムーブメントの建築100選」に北海道の公共建築として唯一選ばれました。
低層部に市民サービス関係の窓口と市長室、議会関係諸室を集約し、その他の機能を高層化することによりランドマークとしての機能を持たせ、足元の敷地を庭園として解放するなど、戦後民主主義を象徴するような市民に開かれた空間構成を意図して設計された点が選定された理由として挙げられています。
また、凍害対策のために表面凹凸を避けて、雪解けによる外壁の汚れを防ぐ水切り、防水層の押さえへの留意など十分な寒地対策に加えて、エントランスホール下部には日本初の融雪装置を設置した点に加え、長い冬に市民に暖かみと親しみを与えるコンクリートとレンガのチェック模様は旭川市と佐藤武夫が協同で築き上げた旭川市民の共有財産であり、歴史的にも景観上にも優れて価値が高い点が評価されました。

modernism ニッポンの モダニズム建築

DOCOMOMO 100 index

Hokkaido 北海道
053　旭川市庁舎
090　札幌の家・上遠野徹自邸

Okayama 岡山県
066　大原美術館分館

Tottori 鳥取県
078　東光園

Hiroshima 広島県
014　広島ピースセンター
045　世界平和記念聖堂

Shimane 島根県
076　出雲大社庁の舎

Yamaguchi 山口県
008　宇部市民館

Kyoto 京都府
003　聴竹居
021　京都西陣電話局
024　本野精吾自邸
037　京都電燈本社屋
060　都ホテル佳水園
062　京都会館
087　国立京都国際会館

Osaka 大阪府
002　住友ビルディング
027　朝日ビルディング
030　大丸心斎橋店
031　大阪市営地下鉄御堂筋線 淀屋橋停留場
032　大阪ガスビルディング
040　大阪中央郵便局
065　千里ニュータウン

Hyogo 兵庫県
023　山邑太左衛門邸
025　辰馬本家酒造白鹿館
043　日本真珠会館
049　浦邸
074　神戸ポートタワー
098　西宮トラピスチヌ修道院

Aomori 青森県
029　木村産業研究所

Yamagata 山形県
089　寒河江市庁舎

Fukushima 福島県
050　福島県教育会館

Gunma 群馬県
017　群馬音楽センター

Saitama 埼玉県
013　秩父セメント第２工場

Chiba 千葉県
096　千葉県立中央図書館

Tokyo 東京
001　一連の同潤会 アパートメントハウス
004　小菅刑務所・管理棟
005　東京中央郵便局
006　土浦亀城自邸
007　慶應義塾幼稚舎本館
011　コアのあるＨ氏のすまい
018　国立屋内総合競技場
019　大学セミナー・ハウス
020　パレスサイドビル
022　自由学園明日館
026　森五商店東京支店
028　東京女子大学
034　四谷第五小学校
035　東京市中央卸売市場 築地本場
038　原邸
042　森博士の家
044　日本相互銀行本店
047　国際文化会館
051　石津邸
054　スカイハウス
056　日比谷電電ビル
057　日本芸術院会館
059　国立西洋美術館
061　外務省庁舎
063　尾崎記念会館
067　東京文化会館
068　明治大学和泉第二校舎
069　NCR ビル
075　三愛ドリームセンター
079　東京カテドラル 聖マリア大聖堂
083　国立劇場
084　白の家
085　ソニービル
086　塔の家
091　新宿駅西口広場・駐車場
094　霞が関ビル
095　普連土学園新校舎
099　代官山ヒルサイドテラス

Kanagawa 神奈川県
010　神奈川県立近代美術館
012　神奈川県立図書館 音楽堂
041　吉田五十八自邸
052　東京都水道局長沢浄水場

Nagasaki 長崎県
070　長崎市公会堂
073　日本二十六聖人記念館
092　親和銀行本店

Saga 佐賀県
097　佐賀県立博物館

Oita 大分県
082　大分県立大分図書館

Kumamoto 熊本県
048　熊本逓信病院

Okinawa 沖縄県
055　聖クララ教会

Kagawa 香川県
016　香川県庁舎
080　百十四銀行本店
093　坂出市人工土地

Ehime 愛媛県
015　日土小学校

Kochi 高知県
081　海のギャラリー

Shizuoka 静岡県
036　日向別邸
046　図書印刷原町工場

Aichi 愛知県
009　八勝館御幸の間
064　名古屋大学豊田講堂
077　南山大学

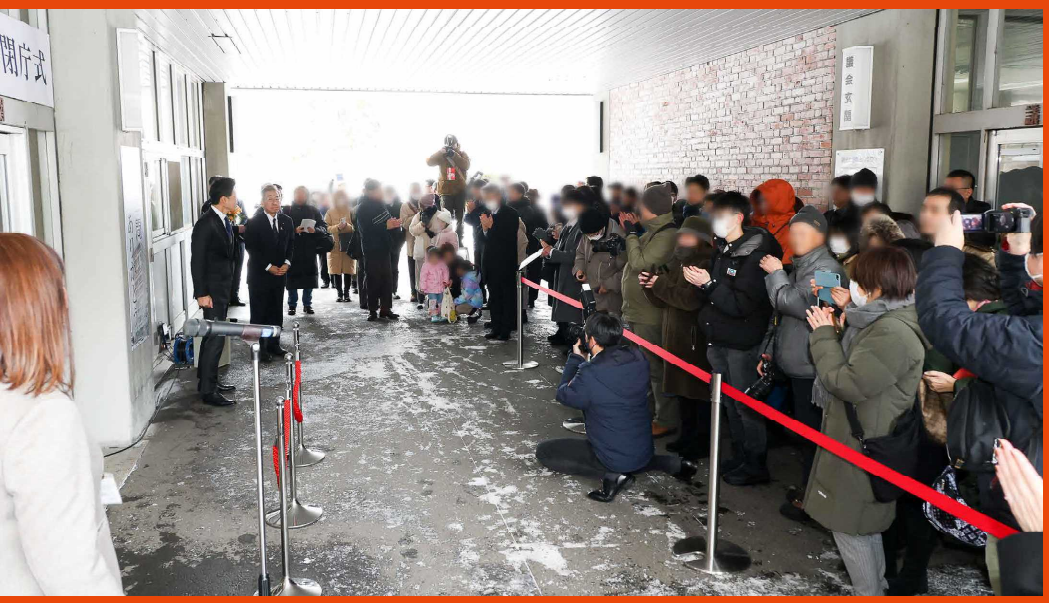
Toyama 富山県
039　黒部川第二発電所ダム

Gifu 岐阜県
058　羽島市庁舎

Yamanashi 山梨県
088　山梨文化会館

Nagano 長野県
033　聖パウロ教会
071　森の中の家
072　軽井沢の新スタジオ

旭川市旧総合庁舎が閉庁



新庁舎の開庁に伴い役割を終えた旭川市旧総合庁舎が令和5年12月17日に閉庁しました。

閉庁式では今津寛介市長、福居秀雄市議会議長により公式玄関を封鎖するセレモニーを実施しました。

また、閉庁式の前には市民見学会を催し、およそ200人の市民が庁内を歩き、家具職人が手がけた議場の机に触れたり、議長室の椅子に座ったりし、旧総合庁舎に別れを惜しんでいました。